

## 使徒の働き4章1-22節 「脅かされない証し」

### 1A 復活に対する苛立ち 1-4

### 2A イエス・キリストの名 5-12

#### 1B 指導者らの誘導尋問 5-7

#### 2B 死者から復活された方 8-12

### 3A なす術のない反対者 13-22

#### 1B 癒された証人 13-17

#### 2B 神に従う証言 18-22

## 本文

使徒の働き4章を開いてください。私たちの使徒の働きの学びは、ペテロとヨハネが、神殿の敷地にて、生まれつき足の不自由な人を立たせた奇跡についてのことでした。イエス・キリストの名によって、立ち上がりなさいと信仰によって命じると、彼は立ち上がり、跳び上がって、神をあがめていました。そこに人々がどっとやってきました。

そこでペテロがはっきりと、イエス・キリストを証したのです。彼が立ち上がったのは、自分たちの力や敬虔さによってではない、神がイエスに栄光を与えたのだ。あなたがたは、イエスを十字架につけたが、神が死者の中からよみがえらせたのだ。悔い改めて、神に立ち上がれば、罪は拭き去られる。万物の改まる時まで、キリストと定められていたイエスは、今、神の右に座しておられるが、その時が来れば、神は遣わしてくださる。そして、イエスは、モーセが予め語っていた、もうひとりの預言者だから、そのことばに聞き従わなければならない。そして、あなたがたは、アブラハムに与えた神の契約の子どもである。あなたがたがイエスによって悪から立ち返って、神の祝福を受けられることができるのだ、と。

そして、主ご自身がガリラヤの宣教以降にお語りになっていた、迫害が始まります。主は、天の御国における幸いを語られ、その幸いの最後が、「義のために迫害される者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。(マタイ 5:10)」その迫害が、神を知らない異教徒によるものではなく、むしろ主によって選ばれたイスラエルの民、しかも指導者から来ることも、主はご存知でした。主ご自身が、イスラエルの家を建てる者たち自身、指導者たちから迫害され、死を遂げられます。ご自身のものとされている彼らも、迫害から免れないことを知っておられました。

そして、次のように言われました。ヨハネ 15 章 23 節から 27 節を読みます。「23 わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいます。24 もしわたしが、ほかのだれも行ったことのないわざを、彼らの間で行わなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今や、彼らはそのわざを見

て、そのうえでわたしとわたしの父を憎みました。25 これは、『彼らはゆえもなくわたしを憎んだ』と、彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてくださいます。27 あなたがたも証しします。初めからわたしと一緒にいたからです。」

イエスが憎まれましたが、聖霊が必ず証ししてくださると約束しておられます。それで、聖霊の力で、あなたがたもわたしを証しすることになるのだと言われます。ペテロとヨハネは、このことをわきまえていました。イエスが、ユダヤ人指導者たちの前でも、そして何よりもローマ総督ピラトの前でも、告白し、証しをされました( I テモテ 6:13)。この方に倣う時に、聖霊の証しによって自分たちも証しすることになるのだとわきまえていたのです。

#### **1A 復活に対する苛立ち 1-4**

<sup>1</sup> ペテロとヨハネが民に話していると、祭司たち、宮の守衛長、サドカイ人たちが二人のところにやって来た。

ルカは、彼らの働きに反対した三種類の人々を挙げています。一つは「祭司たち」です。ルカの福音書の初めに、バプテスマのヨハネの父、ザカリヤがいたことを思い出してください。彼は当番で香壇に仕えました。24 の組に分かれていたのですが、かなり多くの祭司たちがいました。そして、「宮の守衛長」です。神殿の治安を守るような、神殿警察の長と呼んでもよいでしょう。大祭司に次ぐ権威が与えられていたそうです。そしてサドカイ派の人たちです。祭司も宮の守衛長もユダヤ教のサドカイ派に属していましたが、それ以外のサドカイ派の人たちのことです。

サドカイ派は、祭司や貴族階級の人たちだけが属していました。一般の人たちには、パリサイ派の教師が教えていました。サドカイ派は神殿礼拝が守られることが最大の使命であり、多神教を信ずるローマの支配の中で政治的妥協の中で生きていました。

覚えていますか、パリサイ人は先祖から伝わった律法のこと、しばしば「口伝律法」と呼ばれるもので、イエスと対立していました。イエスが、しきたりを守らないので非難していましたが、主は、人の教えによって、神のことばをないがしろにしていると戒められました。そして安息日についての論争が、パリサイ人たちが彼に殺意を抱かせるほどになりました。しかし、使徒の働きでは、パリサイ人の反対が見受けられません。むしろ、ガブリエルは、彼らへの反対に自制を促したほどです。そして、後に、ヤコブがパウロに、「21:20 ユダヤ人の中で信仰に入っている人が何万となくいますが、みな律法に熱心な人たちです。」と言っているほどです。この、律法に熱心な人たちとは、パリサイ派の人たちのことです。彼らが、イエスを信じる根拠となるのが、死者からの復活です。彼らは、聖書の言っているとおり、死者の復活を確信していました。イエスが死者からよみがえったということで、この方がキリストだと悟ったのです。パウロがその一人で、ローマ総督の前でも、

先祖たちが信じてきた死者からの復活を、私も信じているのだと証しました(24章など)。

しかし祭司たちは、サドカイ派の人々です。彼らが、イエスを死刑にする理由は違いました。カヤパの発言を思い出してみましょう。「ヨハ 11:49-50 しかし、彼らのうちの一人で、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは何も分かっていない。一人の人が民に代わって死んで、国民全体が滅びないですむほうが、自分たちにとって得策だということを、考えてもいない。」自分たちの利益のために、一人の人が犠牲になってもらうという判断だったのです。つまり、政治的な判断です。

このように現実主義的な面を、彼らは多分に持っていました。さらに彼らの信仰面での考え方は、合理主義で、物質主義です。目に見えるものしか信じませんでした。聖書は、モーセ五書だけが神のことばであり、霊も御使いも信じていません。復活も信じていません。

それで、イエスに、七人の夫と死に別れて結婚した妻が復活したらどうするのかと問い質したサドカイ人がいましたね。主の答えはこうでした。「マタ 22:29-32 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは聖書も神の力も知らないで、思い違いをしています。30 復活の時には人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。31 死人の復活については、神があなたがたにこう語られたのを読んだことがないのですか。32 『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。」聖書も神の力も知らないと言われます。それから復活について語られ、御使いについても語っておられます。そして、彼らが神のことばだと認めているモーセ五書から、復活を証明しておられます。

そこで、主の復活後は、サドカイ人たちが迫害の急先鋒に立ちます。

<sup>2</sup> 彼らは、二人が民を教え、イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていることに苛立ち、<sup>3</sup> 二人に手をかけて捕らえた。そして、翌日まで留置することにした。すでに夕方だったからである。

ユダヤ人たちは、法廷を召集するのは、日没後はしてはいけないことに、自ら規定の中で定めていました。それで、留置しています。本来はこれが正しい姿なのですが、イエスの法廷の時は、夜に捕らえて、一方的に死刑に定めたのです。いかに不法な手続きだったかが分かります。

<sup>4</sup> しかし、話を聞いた人々のうち大勢が信じ、男の数が五千人ほどになった。

ものすごい人数です。初めのペテロの説教で三千人の男がバプテスマを受けましたが、ここで、生まれながらの男を立ち上がらせた後にペテロとヨハネが語って信じた者たちが、五千人ほどに

なっています。

パウロの言ったことばを思い出します、「I コリ 16:9 実りの多い働きをもたらす門が私たちのために広く開かれています、反対者も大勢いるからです。」主の福音が開かれている時に、反対も大勢いるということです。私たちが、物理的に宣教活動をやめさせられることは、ほぼないですが、もっと日本にキリスト者が増えたら、こういうことは十分にあり得ます。

## 2A イエス・キリストの名 5-12

### 1B 指導者らの誘導尋問 5-7

<sup>5</sup> 翌日、民の指導者たち、長老たち、律法学者たちは、エルサレムに集まった。<sup>6</sup> 大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレクサンドロと、大祭司の一族もみな出席した。

この集まりは、サンヘドリンという71人の構成員のよって成り立っているユダヤ人の最高法院です。(毎回、71人が参加する必要はないですが。)ここでもルカは、サンヘドリンを構成する三種類の人々を挙げていますが、「民の指導者たち」は祭司長たち、「長老たち」というのはパリサイ派の重鎮・そして、「律法学者たち」は口伝律法を含めた律法の解釈をする人たちです。ヨハネ、アレクサンドロについては、知られていません。

そして、「大祭司の一族」が参加していることがすごいです。イエスを裁判にかけたアンナス、そして死刑宣告を出したカヤパがいます。ヨハネの福音書の学びで、カヤパがローマによって任命された大祭司で、その義父アンナスは以前、大祭司の職についていたけれども、カヤパが大祭司になってからもその力を維持していました。ヨハネの福音書では、イエスがカヤパ邸に連れて行かれる前に、アンナスのところに連れて行かれたことが書かれています(18:13)。

宮は、アンナス家が牛耳っていたと言っても過言ではありません。宮清めをイエスが行われた時、直接の影響を受けたのはこれらアンナス家の者たちです。まさに、イエスに対抗して、イエス様を殺すことを仕向けた権力者たちが、勢ぞろいなわけです。

しかし、ここでペテロやヨハネは、イエスが前もって語っておられたみことばを心に留めていたことでしょう。「ルカ 12:11-12 また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。12 言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」と言われました。まさに、今、置かれているのがこの状況です。これから、ペテロが語りますが、その前に「聖霊に満たされて」と出てきます。聖霊の証しを受けて、それで彼が語っていることが分かります。

ペテロが、肉にしたがえば、いかに恐ろしい状況に置かれているかが想像できるかと思います。

カヤパ邸のところまで来て、彼は火にあたっていました。そして女中などに指摘されて、この人の仲間だ、この人と一緒にいたと言われて、こんな人は知らないと三度、言いました。そして今は、その彼らのど真ん中に立たせられているのです。ペテロは、自分自身に頼れば、どれほど最悪な自体かは分かっています。しかし、彼は悔い改めています。イエスが教えられたことを、わきまえていたことでしょう。「ヨハ 15:5b わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」

<sup>7</sup> 彼らは二人を真ん中に立たせて、「おまえたちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」と尋問した。

これは明らかに誘導尋問です。申命記に、このような律法があります。「13:1 あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現れ、あなたに何かのしるしや不思議を示し、2 あなたに告げたそのしるしと不思議が実現して、「さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう」と言っても、3a その預言者、夢見る者のことばに聞き従ってはならない。…5a その預言者あるいは夢見る者は殺されなければならない。」今、生まれつきの足なえをよみがえらせました。ですから、しるしを行って、それをまことの神、主ではない他の名に仕えるようにそそのかすのなら、それは偽預言者だから殺さなければいけないということです。それで、イエスの名を信じさせようとしていることで、ペテロとヨハネを罰することを考えていました。

## 2B 死者から復活された方 8-12

<sup>8</sup> そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。

聖霊が証言してくださり、それをペテロは受けて、これから証言します。イエスが初めに、聖霊が臨まれたら、力を受けて、わたしの証人となると言われました。私たちが、反対者の前、いや反対する空気が満ちているところでも、恐れることなく語ることができるのは、ひとえに聖霊の力によるのです。だから、聖霊に満たされることを求めなければいけません。

<sup>9</sup> 私たちが今日取り調べを受けているのが、一人の病人に対する良いわざと、その人が何によって癒やされたのかということのためなら、

相手が、誘導尋問している中で、人は反論してしまいたくなります。しかし、ペテロは言葉の議論によって反応しませんでした。力をもって証ししています。「一人の病人に対する良いわざ」と言っています。イエスご自身も、良いわざによって証しされました。「ヨハ 10:37-38 もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じてはなりません。38 しかし、行っているのなら、たとえわたしが信じられなくても、わたしのわざを信じなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしも父に在ることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです。」



<sup>10</sup> 皆さんも、またイスラエルのすべての民も、知っていただきたい。この人が治ってあなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの名によることです。

ペテロは、再び、はっきりと十字架と復活の福音を語りました。一般の、礼拝に来ていたユダヤ人たちに、「あなたがたが十字架につけた」と言いましたが、まさにここに集まっている指導者たちは、総督ピラトにイエスを引き渡した張本人たちです。そして、彼らが最も嫌がるのが、死者の復活のことでありますが、そのことも臆せず語っています。

<sup>11</sup>『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石、それが要の石となった』というのは、この方のことです。

ペテロは、イエスが引用された、詩篇 118 篇の言葉を語っています。覚えていますか、主がぶどう園の農夫の喩えで、収穫を受け取るために僕を遣わしても、農夫たちが打ちたたき、「息子ならば敬うだろう」と思ったのに、「息子を殺せば、相続財産が手に入れられる。」として、殺してしまった話をされました。その農夫たちは、まさに彼らのことだったのです。そして、このみことばを引用されたのです。家を建てる者たち、宗教の指導者たち本人が、メシアを見捨てることになるという預言です。しかし、要の石になったとは、この方がよみがえり、神の家を建てる要となるということでもあります。

<sup>12</sup> この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

ここまではっきりと、イエスの名だけによるだけの救いを宣言しています。主は、弟子たちに対して、「ヨハ 14:6 わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」山上の説教で、こうも言われました。「マタ7:13-14 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです。」狭い門とは、イエス様を受け入れる門です。

いろいろな道が神に通じるという時代の風潮、多元主義的な風潮が世界にあります。もちろん、多宗教への敬意は大事です。けれども、救いについては唯一です。神々と呼ばれるものの中で、イエスは次元の異なる方であり、この方こそが神の独り子であられ、すべてのすべてであられ、神と人との唯一の仲介であります。ゆえに、私たちは、イエスがすべてであることを強調しすぎることはありません。

### 3A なす術のない反対者 13-22

#### 1B 癒された証人 13-17

<sup>13</sup> 彼らはペテロとヨハネの大胆さを見、また二人が無学な普通の人であるのを知って驚いた。また、二人がイエスとともにいたのだということも分かってきた。

彼らは驚きました。まず、この大胆さです。大胆のギリシア語の元々の意味は、「自由に語る」というものがあります。これを語ったら危害を受けると恐れることから自由にされている状態です。イエスが、唯一の救い主であること、また十字架につけられ、死んだけれども三日目によみがえられたのは、事実であり、真実です。これをそのままいうことを、自由にやったということです。

そして、「無学な普通の人」と言っています。彼らにとって、確かにガリラヤの漁師であったペテロとヨハネは無学です。ラビとしての正式な教育を受けていません。しかし、主イエスご自身から三年半の間、また復活された後は特に、じっくりと聖書全体からキリストについて解き明かしていただきました。主と共にいて、主から多くのことを学んだのです。

これは、キリスト教会についても多くのことを教えているのではないのでしょうか？神学校に行ったり、学問や学歴によってその人の聖書知識を推し量れるものではありません。カルバリーチャペルの牧者たちの多くが、いわゆる政府公認の、正規の神学校に行ったことはありません。けれども、何らかの形で聖書をじっくりと学んでいます。

つまり、どれだけ、主に教えていただいたのか？ということに基づきます。また、聖霊の働きによります。「I コリ 2:13-14 それについて語るのに、私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばによって御霊のことを説明するのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。」どんなに学識があっても、御霊によって生まれていない人は悟ることができません。逆に無学でも、御霊によって生まれた人はみことばへの見識があります。

そして「二人がイエスとともにいた」と分かったとあります。そうです、彼らはカヤパ邸での裁判の場にいませんでしたし、これら指導者らにとっては無名の人々です。だから、共にいたのだと今、気づいています。しかし、霊的には間違っています。イエスと共にいたのではなく、その時も共にいるのです！トマスのことを思い出してください、よみがえりを疑いましたが、イエスが八日目に現れて、トマスの会話をすべて知っておられ、そこに目に見えずともおられたことを教えています。イエスは弟子たちに、「マタ 28:20 見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」と言われました。

<sup>14</sup>そして、癒やされた人が二人と一緒に立っているのを見ては、返すことばもなかった。

ここが、彼らの証しの力強さが現れています。返すことばもないほどの立証を、この癒やされた人を通して行っているからです。これが、キリスト教信仰の証しです。反証や反論ができないのです。ただ黙るしかないのです。癒やされた人が立っているのですから。目の前に、その証拠があるのですから。いわゆる、正しく語ること以上に、主によって変えられているということに注目していきたいです。それこそが、力ある証しだからです。

<sup>15</sup> 彼らは二人に議場の外に出るように命じ、協議して言った。<sup>16</sup>「あの者たちをどうしようか。あの者たちによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムのすべての住民に知れ渡っていて、われわれはそれを否定しようもない。<sup>17</sup>しかし、これ以上民の間に広まらないように、今後だれにもこの名によって語ってはならない、と彼らを脅しておこう。」

否定しようのない事実に、彼らはどうすればよいか分かりませんでした。「エルサレムのすべての住民に知れ渡っていて」とあるように、証拠隠滅もすることができません。イエスが地上で働きを行われていた時、パリサイ人も、隠しきれぬ証拠の前で変な言動を放ちました。「マタ 12:24 この人が悪霊どもを追い出しているのは、ただ悪霊どものかしらベルゼブルによることだ。」しばしば、多くの人が、「神については、目に見えないから信じられない。」と言います。

では、目に見えたら信じるのでしょうか？いいえ、そうでないのです。金持ちとラザロの話もそうでした。陰府の中でもだえ苦しんでいる金持ちが、アブラハムに言いました。「ルカ 16:30-31 金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ。もし、死んだ者たちの中から、だれかが彼らのところに行けば、彼らは悔い改めるでしょう。』アブラハムは彼に言った。『モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」

それで、彼らは、ただ脅迫するという手段を取りました。「今後だれにもこの名によって語ってはならない」と言って、彼らは注意深く、イエスという名を避けています。自分たちが、イエスの名にある力に飲まれないよう、細心の注意を払っているようです。しかし、彼らの知らなかったことは、脅迫したら、ますます彼らがイエスの名をかたり告げることです。

## 2B 神に従う証言 18-22

<sup>18</sup> そこで、彼らは二人を呼んで、イエスの名によって語ることも教えることも、いっさいしてはならないと命じた。<sup>19</sup>しかし、ペテロとヨハネは彼らに答えた。「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。<sup>20</sup> 私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」



ペテロとヨハネは二つのことを話しています。一つは、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか」であります。このことは明確に神から出たものです。それは、サンヘドリンの議員たちも認めざるを得ないことでした。そうであれば、神の命令に反することを命じる人の命令に聞き従ったら、神の前では正しいと認められなくなってしまいます。

聖書の中には、信仰者の二つの姿勢が出てきます。二つと言っても、本当は一つですが、「権威に従う」というものです。神に従うのはもちろんですが、人の権威に対しても、それが神からのものであることを知って、従うのです。「ロマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」ある人から聞いた話ですが、中国で役人が徴税をしている時に、徴税と言っても米を収めさせるようなので、かなり昔の話だと思います。農民たちが運んできたもののなかで、クリスチャンが運んできたものは、中身を調べもせずそのまま受け取ったそうです。なぜか？他の多くの人には、小さな砂利を入れたりして、ごまかしているけれども、クリスチャンは正直だったからです。私たちは神から立てられていると信じているので、それに従うことに特徴があります。神が、権威を与えられなかったら、その人には力がないからです。

けれども、その立てられている人が、もし神の命令に違反するようなことを命じたとしたら、相手への敬意を保ちつつ、神に聞き従うほうを選ぶのです。出エジプト記では、助産婦たちに、ヘブル人の男の子は殺せとファラオが命じましたが、神を恐れて出産させました。そうやってますます、ヘブル人が増えていきました。ダニエル書では、金の像に拝めというネブカドネツアルの命令に、ダニエルの友人三人は聞き従いませんでした。今でも、そのような選択が迫られる状況はあります。集会を開いてはいけないとする当局の命令に違反して、それでも地下で礼拝する兄弟姉妹が、世界中には数多くあります。

そして、彼らのもう一つの姿勢は、「自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」というものです。彼らはイエスの復活の目撃者です。なぜ復活があったのかを私たちが知ることができるのか？それは、これら使徒たちが、どんな拷問を受けても、どんな非業な死を迎えても、イエスが復活したという証言を曲げなかったからです。12人が申し合わせて、「イエスがよみがえったことにしておこう」として、宣べ伝えていたら、誰かが必ず吐きます。拷問による自白は効果があります。人は苦しみを受けている時、本当のことを口走ってしまいます。けれども、彼らは一貫して否定しなかった。ここに、最も大きな、イエスの復活の事実があります。

<sup>21</sup> そこで彼らは、二人をさらに脅したうえで釈放した。それは、皆の者がこの出来事のゆえに神をあがめていたので、人々の手前、二人を罰する術がなかったからである。<sup>22</sup> このしるしによって癒やされた人は、四十歳を過ぎていた。

あまりにも、この出来事が人々に明らかであり、彼らを罰することができませんでした。イエス様も、エルサレムで、宮で教えておられた時に、捕らえられることがなかったのは、民がこの方を預言者だと認めていたからです。そして、彼らは、神をあがめていました。良いわざに対する、最も適切な反応が、神をあがめることです。イエスが、私たちが世の光であると言われた時に、それは私たちの行いを見て、神を人々があがめるためだと言われました(マタイ 5:16)。

使徒たちに、主がおられることを証しています。そして、この癒された男が、四十歳過ぎであったというのは、生まれてから 40 年以上そうであった人が立ち上がったということです。もしかしたら、イスラエルの民には、四十年間、荒野でさまよって死に絶えたことを思い起こす表現なのかもしれません。死に絶えているはずなのに、それでも立ち上がったという意味合いがあるかもしれません。だれにも反論ができない証しです。

主は、このように、人には説明できない力ある証しをもって、証しすることをみこころとしておられます。福音は、人に救いを与える神の力です。そしてそれが、反対者がいても、妨げられることはないのです。その秘訣は聖霊に満たされることです。